

特集 1

年齢差を超えて 共に学ぶ「シニア学生」

「まだ体力はあるし、経済力もある」
「行動すれば何かが始まる」
「今という時間を大切に」

一般学生との年齢差を超えて共に学ぶ「シニア学生」3人を多摩キャンパスでみつけた。その差は40歳以上、教室ではいやおうなしに目につく存在だ。でも、向学心は誰にも負けない。3人は、それぞれ「まだ体力はあるし、経済力もある」「行動すれば何かが始まる」「今という時間を大切に」と勉学に励みながら、人生路を楽しんでいる。

表紙の人

通年スクーリングで
キャンパスライフ満喫
定年後の自由な時間を
アクティブに使う

63歳



法学部通信教育課程

戸屋博男さん

白のTシャツにスニーカーのラフな格好。白髪によく似合う。とても63歳のお年にはみえない。大学は会社とは違うから「スーツは着ない」という。キャンパスライフをエンジョイしているようにお見受けした。

直接、先生の授業を聞いたかった
春から週3回、多摩キャンパス通い

戸屋博男さんは、法学部の通信教育課程の学生で、いまは自分の子供よりもさらに一回りも若い20歳前後の学生に交じって学んでいる。通教では、一定の資格を満たせば、通学課程の授業を1年間受講できる「通年スクーリング」という制度があ

る。戸屋さんは、その通年スクーリングで今春から、火・水・木と週3日、多摩キャンパスに通っている。通年スクーリングをとったのは、「若い人と一緒に、直接、先生のお話を聞く授業を受けたかったことと、卒業必要単位を早くとりたかった」からだ。自宅が大学に近い八王子市内という地の利もあった。実は、戸屋さんは記者と同じ授業をとっていたため、取材をお願いしたという経緯がある。

30歳で通教入るも、転勤で中断
58歳で編入、でもまたも中断

通教との出会いは、33年前。高校卒業後、写真関連会社で化学関係の研究をする仕事をしながら、早稲田大学（産業技術専修学校・工業化学）に会社から派遣され学んだりしたが、仕事に没頭すればするほど、「いつしか会社人間となり、世間との接点が少なくなってしまう」ことに気付かされた。30歳になったときに、「一つの区切りとして視野を広げる何かをやろう」と考え、通教を知り、入った。だが、はじめてから数年で広島の関係会社に出向したり、仕事も忙しくなったりで、勉強を中断せざるをえなかった。

忙しいサラリーマン生活で仕事に追われるまま、あと2年で60歳の定年を迎えるという時に、「定年になったら何をしようか」と考え、昔、通教をやっていたのを思い出した。大学に問い合わせたら、30年ぐらい前の単位がまだ有効との回答もあって58歳で再入学（編入）した。

しかし、編入手続きをして教科書を購入したものの、仕事の忙しさにかまけて、「積ん読」だけで、時間が過ぎてしまった。

60歳定年で、改めてチャレンジ 学生会に参加し、刺激を受ける

そして60歳の定年を迎えた。「会社人生では、次々と新しい未知の仕事に従事し、真剣に約40年間働いてきましたし、その専門知識もありました。しかし、今ならまだ体力はあるし、経済力もある程度あるし、何か新しいことをやろうと思えました。新聞をじっくり読むと、全然知らない世界、新しい世界が広がっていたんです」と持ち前のチャレンジ精神に火がついた。

「定年後も囑託のように従来と同じ領域の仕事を続けるという手段もあるけど、私は、それまでの会社人生では、経験できなかった世界を体験しよう」と決め、良き人間関係を除いて、あえて会社とのしがらみを切りました」。そして、新しい世界に飛び込むため、選んだものの一つが通教だった。ところが、やりたいことを色々始めたため、定年後1年経った時点まで通教のテキストは全く読んでなく、当然の結果として1単位も取れていない。「やめようかと思った」が、毎月送られてくる「白門」で、学生が自主的に組織して学習会を開いている学生会の活動を改めて確認、参加したとき、大きな刺激を受けた。「自分より20歳も上の人が一生懸命に学んでいるのを見て、負けては

いられないと思った」のだ。

苦労するレポートの提出

通教では、与えられた課題に対し、テキストや参考書・判例などを読み、1単位につき1通のレポートを提出し、インストラクターの添削・指導を受ける。そのレポートの合格と科目試験の合格があつてはじめて単位がもらえる。夏季スクーリングなどの面接授業やメディア授業をとれば、それとはまた別の単位の取得方法がある。

学生会に参加し、「レポートは、1回で合格できずに、4回も、5回も出してやっと合格した学生の話や、インストラクターの方からは真剣に添削されている話を聞き、みんなが真剣に取り組まれていることがわかり、私もがんばらなくては、と思い直しました」。あれから3年、今年度中には、卒論を除き卒業必要単位を取るのが目標、ということまでできた。

テニスにマンドリン、そして語学 料理教室に3年通い、「主夫」こなす

戸屋さんの生活はアクティブだ。まずはテニス。小学生のときから続けていたが、50歳頃からは休止状態だった。いまは「ウォーキングからはじめて体力づくりに努め、体重を7キロ減量しました。これからテニスも頻度を上げ試合にも出るつもりです」と本気で取り組んでいる。

また、20代のころやっていたマンドリンを40代

半ばに再開。「去年は、日中国交正常化35周年記念の訪中国の一員として、大連でのコンサートに参加しました」と本格的だ。

語学の勉強にも精を出す。4、5年前、夫婦で中国へ行ったとき、移動の飛行機の中で、母子連れの中国人に話し掛けられたが、全然わからなかった。「こちらが話せないとわかると、プイッと横をむかれました」。その体験から、中国語の教室に1年半通った。

「スペインに行ったらスペイン語、ロシアに行けばロシア語というように、どこの国に行っても2回目に行ったときには話せるようになりたい」と意気さかんだ。

さらに、定年後、料理教室に3年通った。家族の弁当をつくる「主夫」もこなす。「おいしいものを自分で作れたら、最高じゃないですか」と目を輝かせる。書道もはじめたが、これは通年スクー



白のTシャツがよく似合う戸屋さん
料理の腕も自慢だ

リングで大学に通うようになって中断している。他方、毎月、歌舞伎や新劇、能、美術展等を観に行ったり、また、都内で行われるいろいろなセミナーにも通った。「この種の文化的なことには殆ど接してこなかったのだ」と笑う。

「教授の話を直接聞くのはやっぱりいい」と強調し、通年スクーリングで「法律の勉強がいろいろおもしろくなってきましたよ」という。「いまは、時間もあるし、やりたいことは、何でもできるから、自由に空を飛んでいる感じです」。

なんとアクティブなのだろう。明るい笑顔には、定年後の生活を満喫している様子があふれている。

(学生記者 武田朋美 法学部3年)

「自分がなれる 最高の自分になりたい」 向学心支える 『地の塩』の教え



法学部法律学科2年

藤井春代さん

「自分がなれる最高の自分になりたい」

目を輝かせてこう話す藤井春代さんは、法学部



「行動すれば何か起きる」と藤井さん

法学部の2年生。年齢は団塊世代に属する。高校を卒業し、就職。その後結婚して、山口県で2人の娘さんを育てた。そして今は大学生。

何か形になるもので力つきたい 10年かけて英検1級を取得

下の娘さんが小学校入学後、少しゆとりができた藤井さんは、何かを始めよう、と思いついた。「ただ主婦業をこなすだけでは虚しいし、自分が年をとった時に、何か形になるものがないと恐怖を感じる。年をとった女性は、社会的地位がとても弱いから、それを守るためにも力をつけたいと思いました」。

そこで選んだのは、英検1級を取得することだった。もともと観光業やボランティアに興味があり、マザーテレサがボランティアを行う時の必要最低条件に英語力をあげていたことが決め手と

なった。

まずはラジオ講座から始め、英会話教室にも通い、英検準1級までは順調に進んだ。さらにその上の英検1級を取得するため、山口県内の大学の聴講生として10年間通い、やっと英検1級を取得した。

「合格するまで20回は受けたでしょうか。周りからは、『まだやってるの？もうやめたら』と言われました」という。でも、へこむことはなかった。

強まる大学コンプレックス 50代後半で大学進学目指す

非常勤講師をしていた英会話学校で、高校生の生徒から「先生は、どこの大学に行っていたの？ 大学はどこなところ？」と質問されることがよくあった。しかし、大学に進学していなかったため、生徒の質問に答えられず、そのことが先生としてのコンプレックスになっていった。

「英語は教えることができるのに、自分の経験を話してあげられない。大学に行きたい」。日に日にその思いが募っていった。

娘さんが大学に進学した際、「これで私の大学に行きたい気持ちがおさまるかな、と思ったのですが、やはり、大学に通っているのは自分ではなくて娘なので、気持ちはおさまらなかった」という。

そこで、山口県の大学で通信教育を受講。しかし、理想の勉強ができず、続かなかった。そうこうするうちに、2人の娘さんは社会人になり、母親としての手が離れた。夫はいえ、早期退職。

「今、家族がそれぞれの道に進む時だ。自分で稼いだお金を自己投資しよう」と、50歳代後半で大学進学にむけて本気で考え始めた。

法律を勉強するなら、と中大選ぶ

“解散宣言”して理解してくれた家族

今までは英語を極めてきたため、大学では別のことを学ぼうと考えた。そこで、自分が生きてきた日常生活で、法律を使う場面がよくあることを思い起こし、法律を知る必要性を感じたため、法学部を志望した。

「法学部が有名な大学といえば、中央大学だ」と即座に考え、山口県在住にもかかわらず、「後先考えずに中央大学を選んだ」という。

社会人入試で、論文、面接の試験を受けた。日頃から感想文や新聞の投稿などを行っていたため、文章力には自信があったが、面接の際、論文に関



女子学生のファッションにも関心が

して厳しい批判を受けた。それで、「記念受験になるかもしれないな」とあきらめかけていたが、見事合格。「合格はうれしかったけど、実際たじろぎました」と笑う。

家族に合格を報告すると、家族はとても驚いたそうだった。しかし、誰一人として反対することはなかったという。4月になり、藤井さんは山口県から単身赴任。家族は「それぞれのポジションにしよう」と解散宣言した。

年齢差に孤独感、学生課に相談も

いまは女子学生とも打ち解ける

いま、藤井さんは大学近くにアパートを借り、一人住まいしている。大学生活の苦労を尋ねると、「一番は年齢です。最初は、まるで別の国に来たように感じました。若い人がたくさんいる教室の中で、自分はどう見られているのだろう?と気になるし、孤独を感じます。なにより同世代がないことが寂しいです」

1年生の頃、孤独感に耐えられなくなり、学生課に相談に行った。そこで、同世代の人に話を聞いてもらえて、「勉強は最終的には一人ですもの。誰かにすぎるのではなく、毎日やるべきことをやっていこう」と考え、楽になったそう。

また、藤井さんが学生に「私みたいなのが大学に来ていて嫌じゃない?」と聞くと、学生は「色々な人がいるのが大学でしょう?だから、普通だよ」と答えてくれたことにも喜びを感じたという。

今では、同じクラスの女子学生と英語が好きというつながりで、仲良くして、学生のファッションなどを見て楽しんでいう。買い物に行った時も、「学生がこんな服を着ていたな」とつい見えてしまうそう。

一方、大学で楽しいことは、という質問には、「学食です。学食は安くて、おいしいから、貧乏学生にはありがたいです」と一般学生と同様の答えが返ってきたことに驚いた。年齢差はあっても、「学生」の考えていることは同じなのだ、と納得した。

目標をもつことで生活にハリ

東京の単身暮らしで家族に感謝

英検1級を取得した後、通訳ガイドの試験を受けて、英語と一般常識、地理・歴史などの邦文試験の1次試験は受かったが、面接の2次試験は落ちてしまった。

「大学では法律だけでなく、一般常識も学ぶことができて、うれしく感じています。英語には自信があったのですが、学生さんの中にはできる人がたくさんいて、感心しました。英単語の裏にあるものも知ることができて、謎が解明されていくのです。自分が知らないことを知ることができるというのは、本当にうれしいです。今年の秋にはガイド試験に再チャレンジします」

英検1級取得をあきらめなかったり、50代で大学に行こうと考えたり、その力はどこからでてく

るのだろう。

「私、自尊心が強いというか、合格しない自分が嫌なんです。誰かと比べてではなく、自分に勝ちたいと思っっているんです。一つの目標をもつことで、それが生活のハリになっていくし。私はエゴイストなのか」と笑いながら話してくれた。

しかし、自分の行動が本当に正しいか不安になることもあるという。藤井さんの母親は88歳で、山口県に住んでいるが、自分は東京で暮らしているため、そばにいてあげることができない。そこで、藤井さんの代わりにお姉さんが母親の面倒をみてくれている。

「そんな姉や、家族の支えがあるからこそ、大学に通うことができていて、本当にみんなに感謝しています」。家族の絆があるからこそ、藤井さんのアグレッシブさがあるのだと感じた。

目標は山口県で通訳ガイド 団塊世代は思い切って冒険を

今後やりたいことは、キリスト教の教えの中にある、「地の塩（イスラエルでは、塩は貴重なものである、という由来から、目には見えないけれども必要なもの、下支えるものの意）」の存在になりたいそうだ。具体的には、通訳ガイドに合格して、山口県で通訳のボランティアをすることと、地方行政にも興味をもってきたため、地域活性化などの役に立ちたいと考えている。

最後に、団塊世代の方々に対してのメッセージ

をお願いした。

「老後に入って、みんな守りの生活に入っていくと思うのですが、やり残したことがあるならば、思い切って自分投資をしてみてください。行動すれば、何かが始まります。行動してから軌道修正しても遅くないと思います。自分の道は自分で切り開いていくもの。最期の時にやり残したことがないように、楽しかったといえるように、思い切って冒険してみてください。勝ち組・負け組というのがあるけれど、敗者復活戦はいつでもありますから、自分の能力の中で精一杯やって、自分がなれる最高の自分になって下さい」

（学生記者 橋本あずさⅡ法学部1年）

「限られた時間を大切に」。 いま学ぶ 社会正義とは何か。 を考え続けたい



65歳

法学部通信教育課程

松田清治さん

待ち合わせ場所に現れた松田清治さんは、やわらかな物腰で、「はじめまして。よろしくお願

します」と挨拶された。記者は恐縮したが、質問にも丁寧な答えてくださった。

4月から通年スクーリングで学ぶ 刺激になる若い学生と一緒に勉強

松田さんは、いま通年スクーリング制度によって財政学や国際政治史の講義を学部学生と一緒に受講している。法学部通信教育課程の法律科目は単位をとり終えて、4月から多摩キャンパスに通っている。

「若い学生さんに交じって勉強するのはとても刺激になります。学生さんたちの若さがうらやましくもあり、負けないように頑張ろうという気持ちも起ります」

65歳の松田さんは、教室で席を同じくして学ぶ学生とは、40歳以上の年齢差がある。「学生さんたちは、子どもと孫の間ぐらいですね」と笑う。でも学んでいることは一緒に、どこか「ライバル心」も湧いてくるようだ。

講義を受講し、「勉強が楽しい」 一言も聞き洩らすまいと集中

「先生の講義を直接聞けるといいうのはありがたいことですね。それによって一人で勉強しているときは違った新たな発見がたくさんできました」

これまでは通信教育のため、一人で勉強してきた。一人でテキストを読んで勉強するのはかなり大

変でした。でも自分がかもともやりたいたいことでもあったので頑張れました」と振り返りながら、「今は勉強が純粋に楽しい」と教室で講義を直接受けられることを素直に喜んでる。

「せっかく授業料を払っているのだから先生の話聞き漏らすのはもったいないことです。私は一言だって聞き漏らすものか、という気持ちで講義を受けています。もっと直接講義を受けられるありがたさを実感して欲しいと思います」

講義に遅刻したり居眠りをしたりしている一部のだらしない学生に対しては、手厳しい意見が飛んだ。

高卒後、上京、大学進学かなわず 持ち続けていた法律への強い関心

松田さんは、秋田県の高校を卒業した後、「東京に出て行けばなんとかなるだろう」と大学進学を希望を胸に上京した。しかし、当時の大学進学はそう容易ではなかった。衣料品の小売りなどを行う会社に就職したものの、のちに離職。飛行機の積荷の運搬やコーヒード豆の焙煎など様々なアルバイトをしながら専門学校に通い、電気通信系の会社に再び就職した。働くうちに大学で学びたいという気持ちが強くなり、仕事との両立を考え通信教育で大学への進学を決めた。

中央大学を選んだ理由は、数十年來持ち続けていた法律への強い関心からだった。

「今でもよく覚えています。私が中学2年生

だったとき、社会科の先生が授業中に当時話題だった八海事件における弁護士活動について身振り手振りを交えて説明してくれました」

八海事件とは1951年1月25日に山口県熊毛郡麻郷（おごう）村八海（やかい）で発生した夫婦強盗殺人事件で、被告人5人のうち4人が無罪になったという有名な冤罪事件である。

証言台で証言した経験も 学生は勉強が当たり前

「当時の私には共同犯ではない、逮捕された4人が可哀そうだという程度の印象でした。その後、三回目の上告で4人全員が無罪になりましたが、いまでもこの事件を通して自白・拷問・冤罪とは何か、死刑から無罪が確定した裁判、社会正義とは何かについて考えさせられ、関心をもち続けています」という。

また松田さんは在職中に「損害賠償反訴請求事件」で反訴被告の会社の証人として、福岡地方裁判所の証言台に立つという経験をした。「証人として、一言一句かなりのプレッシャーを感じて証言したことを思い出します」。この経験も法律への関心を一層高めるきっかけとなった。

最後に学生に対し、「幅広い物の捉え方ができるようにになってもらいたいです。そのためには今勉強しておくのは当たり前です。きっと勉強によって培った様々な知識がそれを助けてくれます」と人生経験豊かな松田さんならではの助言を



物腰の柔らかな松田さん

いただいた。

「それと、ぜひ語学を身につけて欲しいですね。最も大切なのは今という時間を大切にすることです。今という時間はその瞬間にたちまち過去になってしまふからです。限りある時間を大切にしてください」

65歳で学生として学び、人生路の時間を大切にしている松田さんの言葉だけに重く響いた。

（学生記者 駒田恵二法学部3年）